福岡市埋蔵文化財調査報告書第1099集

ヒワタシ遺跡１

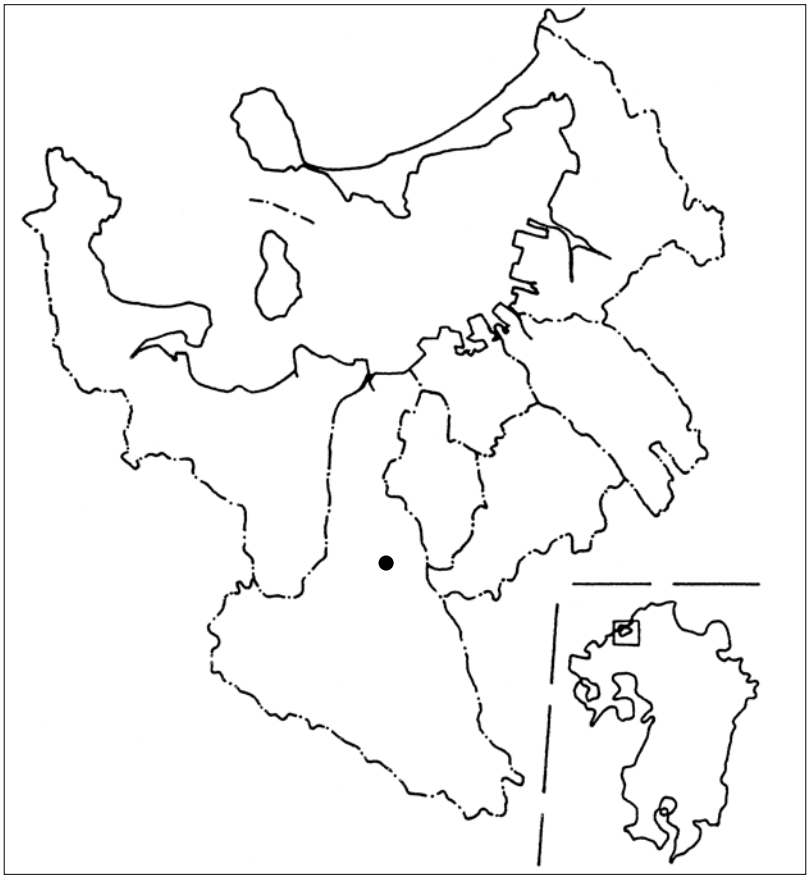
ヒワタシ遺跡第１次調査報告

２０１０
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1099集

ヒワタシ遺跡１

ヒワタシ遺跡第１次調査報告



遺跡略号　HWT-1
調査番号　0841

２０１０
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、古来その地理的特性を生かし、朝鮮半島や中国大陸との交流を盛んに行い、発展を遂げてきました。その物的証拠として市内各地に集落跡や古墳など多数の埋蔵文化財が残されています。

しかしその貴重な先人の足跡も、近年の開発工事により、失われつつあります。福岡市教育委員会は、こうしたやむをえず消滅していく埋蔵文化財を将来に伝えるため、市民の皆様のご理解とご協力に支えられ、発掘調査を実施し、記録として残す努力を続けています。

本書はその一環であるヒワタシ遺跡第１次調査の成果を報告するものです。古墳時代～古代にかけての建物跡、生産遺構などが確認されました。ヒワタシ遺跡は今回が初めての発掘調査であり、周辺遺跡における調査成果と合わせて、遺跡の実態を明らかにしていくきっかけとなると考えられます。

最後に今回の発掘調査にご協力いただいたディー・アンド・エイチ株式会社ならびに周辺住民の皆様に感謝の意を表します。

平成22年３月23日

福岡市教育委員会
教育長　　山田　裕嗣

例言

1．本書は戸建分譲宅地造成に伴い、福岡市早良区東入部二丁目1773－１・２、1776において実施したヒワタシ遺跡第１次調査の報告である。
2．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
　ピット　SP　　掘立柱建物　SB　　溝　SD　　土坑　SK
3．遺構の実測は木下博文のほか以下の者が行った。
　梅野眞澄・辻節子・三谷朗子
4．本書で用いる方位は磁北であり、真北から６°21′西偏する。
5．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6．遺物の実測は木下博文が行った。
7．製図は木下博文が行った。
8．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する。
9．本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号　０８４１	遺跡略号　ＨＷＴ－１	分布地図番号　85　入部　０３３９
所在地　早良区東入部二丁目1773－１・２、1776　　事前審査番号　20－２－149		
開発面積　4625.80㎡　　調査対象面積　292.0㎡　　調査面積　329.5㎡		
調査期間　　2008．９．22～10．15		

本文目次

第１章　はじめに……1
１　調査に至る経緯
２　調査体制
第２章　遺跡の位置と環境……1
第３章　調査の記録……5
１　調査の概要
２　遺構と遺物
第４章　まとめ……8

挿図目次

図１　遺跡の位置（Ｓ＝1/25000）……2
図２　調査地点位置図（Ｓ＝1/4000）……2
図３　調査区位置図（Ｓ＝1/500）……3
図４　調査区平面図（Ｓ＝1/200）……4
図５　調査区西壁土層断面図（Ｓ＝1/80）……4
図６　SD01 断面および出土遺物実測図（Ｓ＝1/40、1/3）……5
図７　SB03 実測図（Ｓ＝1/60）……6
図８　SK02・04 実測図（Ｓ＝1/40）……7
図９　ピット出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……7

図版目次

図版１　上　調査区全景（北から）　下　調査作業風景……9
図版２　上　調査区東壁土層断面（北西から）　下　調査区西壁土層断面（南東から）……10
図版３　上　SB03（西から）　下　SB03・SD01（北から）……11
図版４　上　SK02（西から）　下　SK02 土層断面（西から）……12
図版５　上　SP10 上層土師器壺出土状況　下　SP10 下層土師器壺出土状況（西から）……13
図版６　上　SK04（西から）……14
図版７　出土遺物……15

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

平成20(2008)年５月23日、ディー・アンド・エイチ株式会社（代表取締役　坂口剛彦氏）より、福岡市教育委員会宛に、福岡市早良区東入部二丁目1773－１・２、1776、1779－１における戸建分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった（事前審査番号20－２－149)。申請地はヒワタシ遺跡の範囲内に含まれることから、試掘調査を７月15日に行った。その結果現地表面下0.6～1.0ｍで遺構を検出した。

申請地の内、1779－１を含む北半は、平成19(2007)年３月16日付の共同住宅建設に伴う申請（申請番号18－２－1060）とそれを受けた４月３日の試掘調査の結果より、遺構なし・慎重工事となっている。

今回はその慎重工事部分を除く南半、申請地内中央を南北に通る幅6.0ｍ・長さ50ｍの道路部分のみを対象として調査を実施することとなった。

本調査は平成20(2008)年９月22日に着手し、10月15日に終了した。

２　調査体制（当時）

申請者　　ディー・アンド・エイチ株式会社
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
調査総括　埋蔵文化財第２課長　田中寿夫
　　調査第１係長　杉山富雄
調査庶務　文化財管理課管理係　井上幸江
事前審査　埋蔵文化財第１課事前審査係　阿部泰之
調査担当　　調査第２係　木下博文
調査作業　梅野眞澄　緒方国光　木田ひろ子　国友和夫　高木美千代　高木章夫　辻節子
　　時吉ひとみ　深溝嘉江　松本順子　三谷朗子　吉鹿裕隆
整理作業　大園由紀子

第２章　遺跡の位置と環境

福岡市の西部、室見川が山間の狭隘部を抜け、早良平野に出た東岸地帯には、東入部・岩本・清末・重留の各遺跡が展開する。これらの遺跡は昭和62年度より圃場整備に伴う調査が行われ、成果が挙がっている。

古くは縄文後期の鐘ヶ崎式～北久根山式と見られる土器、石器が出土している。弥生時代の甕棺墓・土壙墓といった埋葬遺構、弥生前期～古墳時代の竪穴住居群や奈良～平安期の掘立柱建物といった生活遺構のほか、廃滓坑・焼土坑・鍛冶炉といった鉄関連の生産遺構も目立つ。また平安末期～鎌倉初頭の木棺墓も検出されており、龍泉窯系劃花文または鎬蓮弁文青磁碗が副葬されるなど、一定の階層の居住が推測され、興味深い事例が挙がっている。

ヒワタシ遺跡は、上記遺跡群とは国道263号線を挟んだ西側、荒平山北西麓の標高34ｍの段丘上に立地する。これまで試掘調査が行われ、一部古墳時代のカマド片が出土しているものの、概して遺構が検出されておらず、調査事例がないため、具体的様相は不明であった。

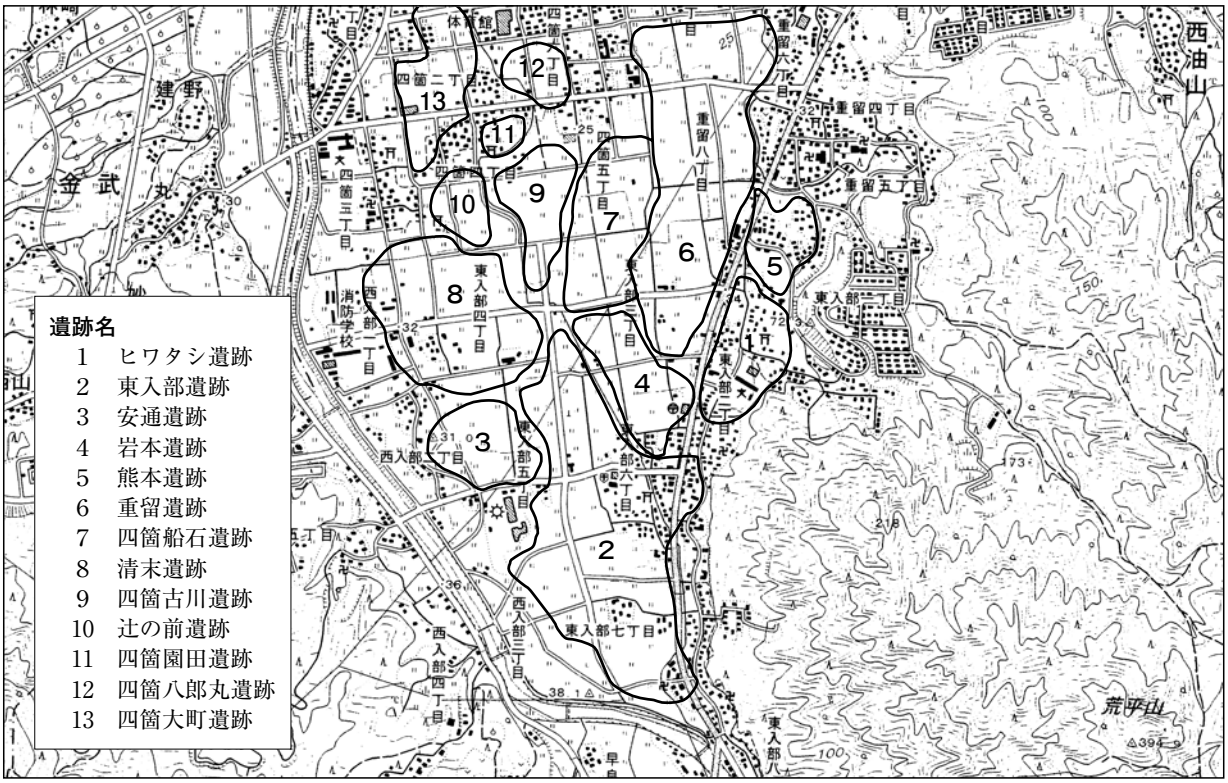


図１　遺跡の位置（Ｓ＝ 1/25000）

図２　調査地点位置図（S=1/4000）

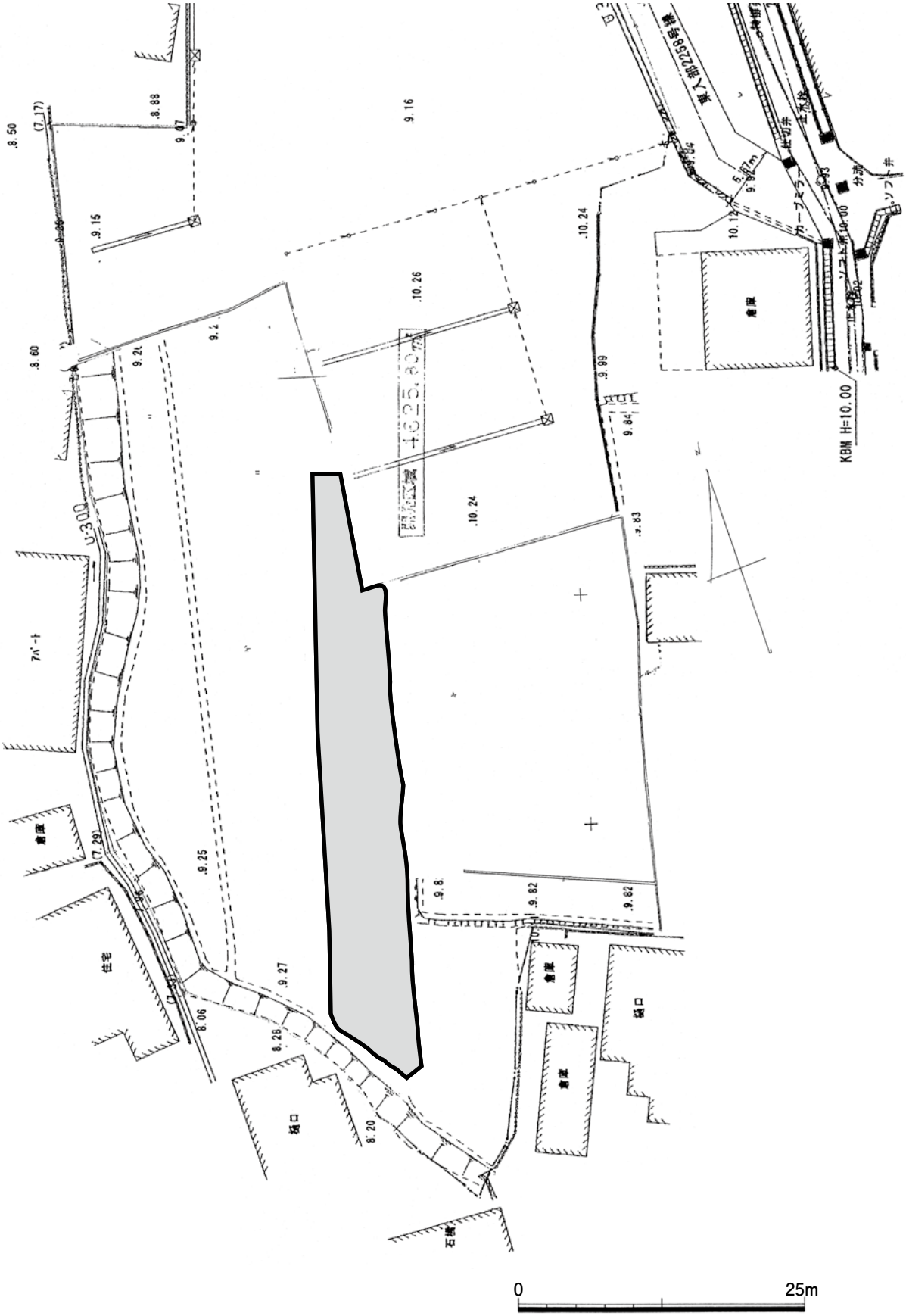


図３　調査区位置図（Ｓ＝1/500）

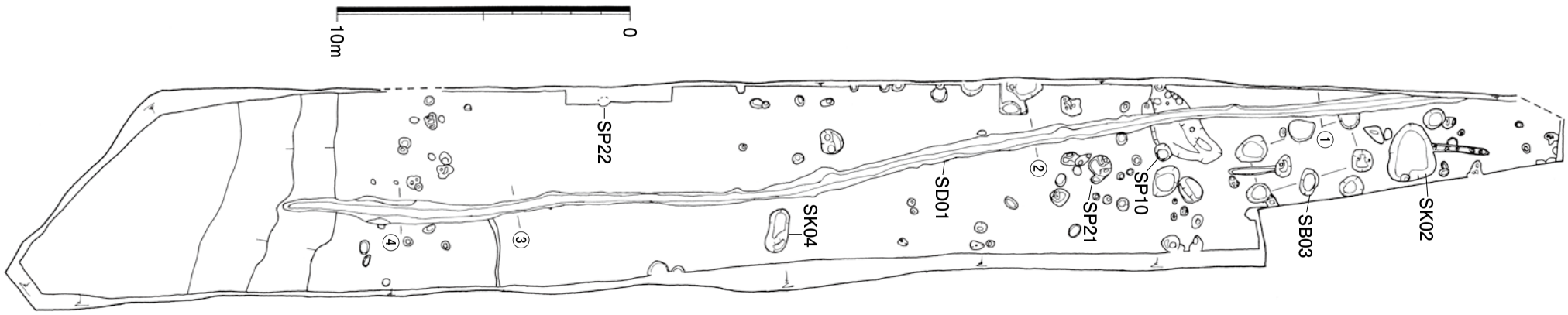
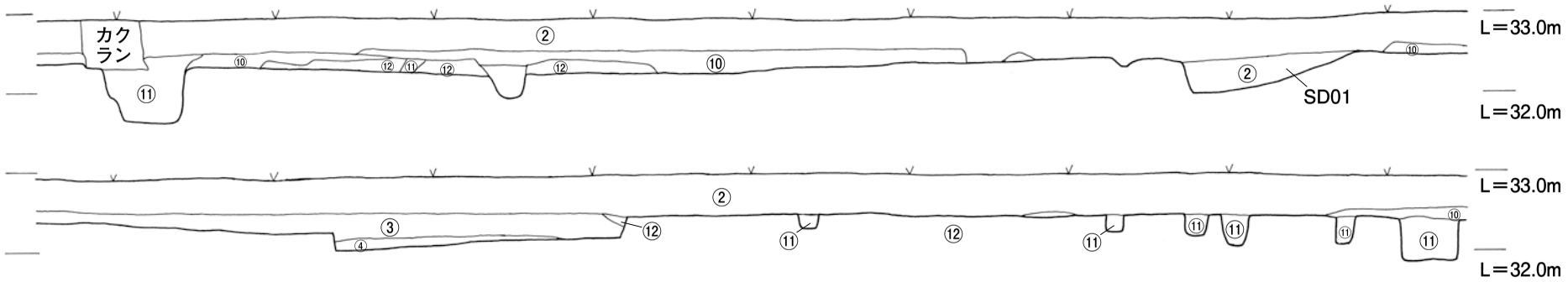
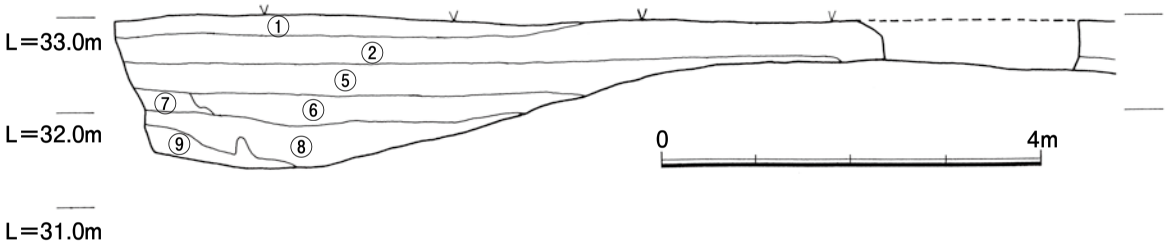


図４　調査区平面図（S=1/200）





調査区西壁

① 灰色土　　② 灰褐色土
③ 暗灰褐色小礫混土（1cm大）
④ 灰白色砂質土（1cm大の小礫混）
⑤ 灰褐色土（0.5cm大の小礫混）この層の上面に鉄分層あり。
⑥ ⑤より小礫の量・粒大きくなる。
⑦ 灰褐色粘質土（0.5cm大の小礫混）
⑧ 暗灰褐色土（0.5cm大の小礫、炭微量含む）
⑨ 黄褐色粗砂　　⑩ ③と同じ
⑪ 灰褐色土（黄褐色土粒混）
⑫ 黄褐色シルト（0.5cm大の小礫混）

図５　調査区西壁土層断面図（S＝1/80）

第３章　調査の記録

１　調査の概要

調査区の現地表は標高33mで東側がやや高い。厚さ0.5～0.6mの耕作土の直下で黄褐色シルトとなり、この上面で遺構が集中的に検出された。この土は調査区北半に広がっており、南半は一部削平されたとみられ、黄褐色シルトの下に堆積する白い礫粒混じり暗褐色砂質土に直に耕作土が堆積している。従って遺構は黄褐色シルトが残る北半に多く、南半には少ないという状況となっている。

調査区南端は谷状の落ちとなっている。西隣で行われた試掘調査で自然流路が確認されていることから、その一部を検出したものとみられる。

遺構は掘立柱建物１、溝１、土坑２、ピット群を検出した。出土遺物は土師器・須恵器など小コンテナ１箱分である。

２　遺構と遺物

掘立柱建物

SB03（図７、図版３）

調査区北半で検出した１×２間の南北棟である。ピットは径0.7mの円形から長軸1.0m・短軸0.8mの不正楕円形を呈し、深さは0.4～0.5mである。北西隅のピットがSD01によって切られている。総柱建物としてもう１間分東に延びる可能性も考えられる。埋土は茶色味の強い暗褐色土、遺物は土師器とみられる破片が少量出土している。

溝

SD01（図４・６、図版３）

調査区北端から南端の谷状落ちまで延びる。長さ40m以上、幅0.5m・深さ0.3～0.4mである。出土遺物は須恵器・土師器の小破片を主とし、中世の陶磁器、鉄滓少量が含まれている。埋土は灰色でしまりがなく、上層の耕作土に近いことから、時期はさらに下る可能性も考えられる。

出土遺物（図６、図版７）

１は焼締陶器の椀である。復元高台径5.2㎝、残存高4.6㎝、色調は内外面ともに暗赤褐色、断面は表層が青灰色、内部が灰色を帯びる。

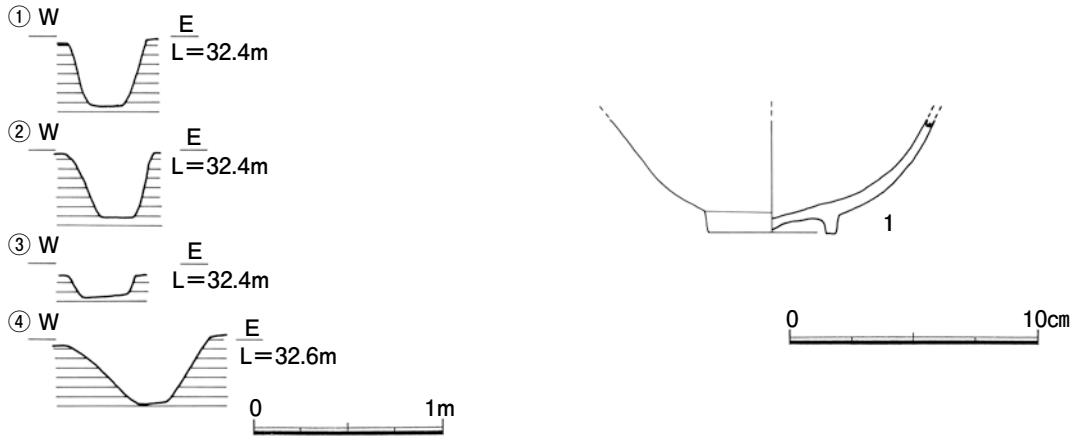


図６　SD01 断面および出土遺物実測図（S＝1/40・1/3）

土坑

SK02（図８、図版４）

調査区北端、SB03の北側に位置する。平面は底辺1.5m、高さ1.95mの丸みを帯びた略三角形を呈し、深さ0.46mである。西半の一部に焼土があり、壁を成したとみられるが、やや大きめの土坑掘形の壁との空間を土で詰める構造になっている。埋土は暗褐色土で、一部に炭を含む。出土遺物は土師器の破片を主とする。

SK04（図８、図版５）

調査区中央、東壁寄りで検出した。長さ1.45m、幅0.67m、深さ0.26mの楕円形である。埋土は炭を多量に含む褐色土で、遺物は出土していない。

ピット出土遺物（図９、図版７）

１・２は土師器の壺である。１は復元口径13.6㎝、残存高15.1㎝、色調は浅黄橙、胎土は密で１～２㎜大の白色砂粒を少量含む。調整について、外面は胴部に斜め方向、肩部付近に縦方向、口頸部に横なでと縦方向の刷毛目を施し、内面は口頸部に横方向の刷毛目、頸部以下はヘラ削りを施す。２は復元口径16.0㎝、残存高11.5㎝、その他は１とほぼ共通するが含まれる砂粒が１よりはやや大きく、量は少ないこと、口頸部外面に縦方向の刷毛目がないこと、口縁端部に黒斑があることが異なる。いずれもSP10の出土で、層位は１が上層、２が中層である。

３は弥生土器甕の底部か。復元底径6.0㎝でレンズ底を呈する。色調は暗灰褐色で胎土は0.5～２㎜大の白色砂粒を多量に含む。SP21から出土した。

４は施釉陶器の四耳壺である。復元口径8.4㎝、残存高10.4㎝、色調は灰色の素地に淡灰緑色の釉薬が内外面ともにかかる。胎土は密で１㎜大の鉄分が少量含まれる。SP22から出土した。

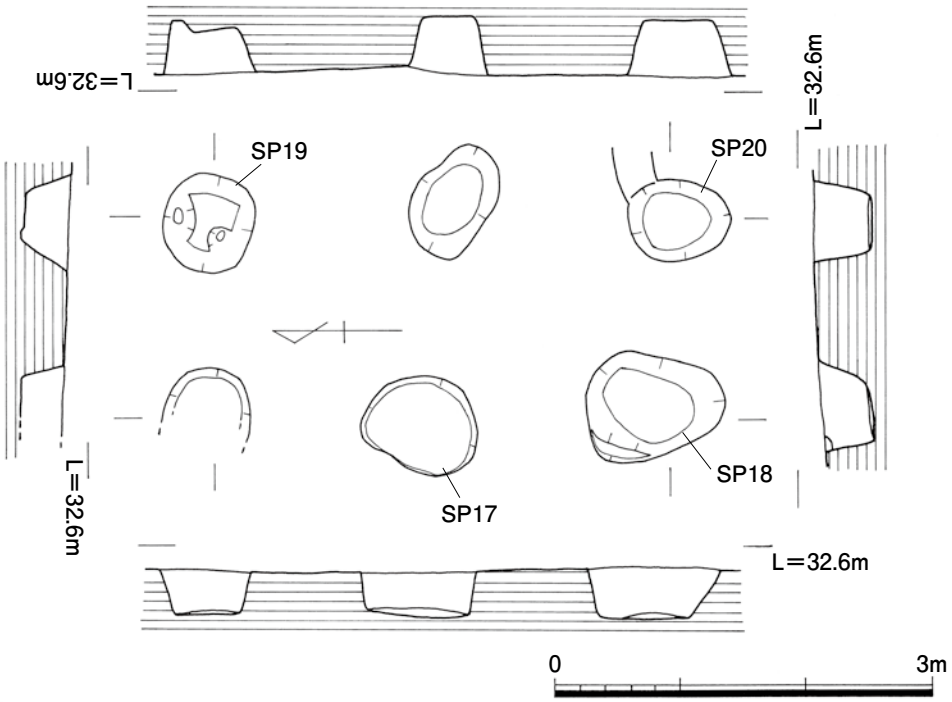
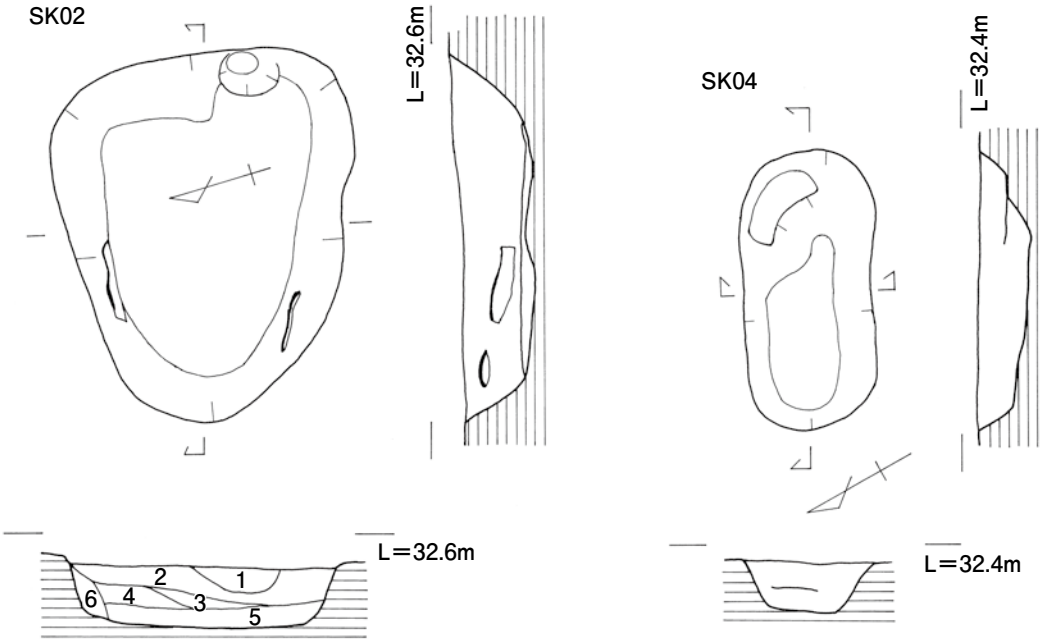


図７　SB03　実測図（S＝1/60）



SK02
1　暗褐色土（炭粒多量含む）
2　暗灰褐色土
3　暗灰褐色土（炭粒多量含む）
4　２と同じ
5　３と同じ
6　茶褐色土（黄褐色土粒・炭粒混）

0　2m

図８　SK02・04　実測図（S＝1/40）

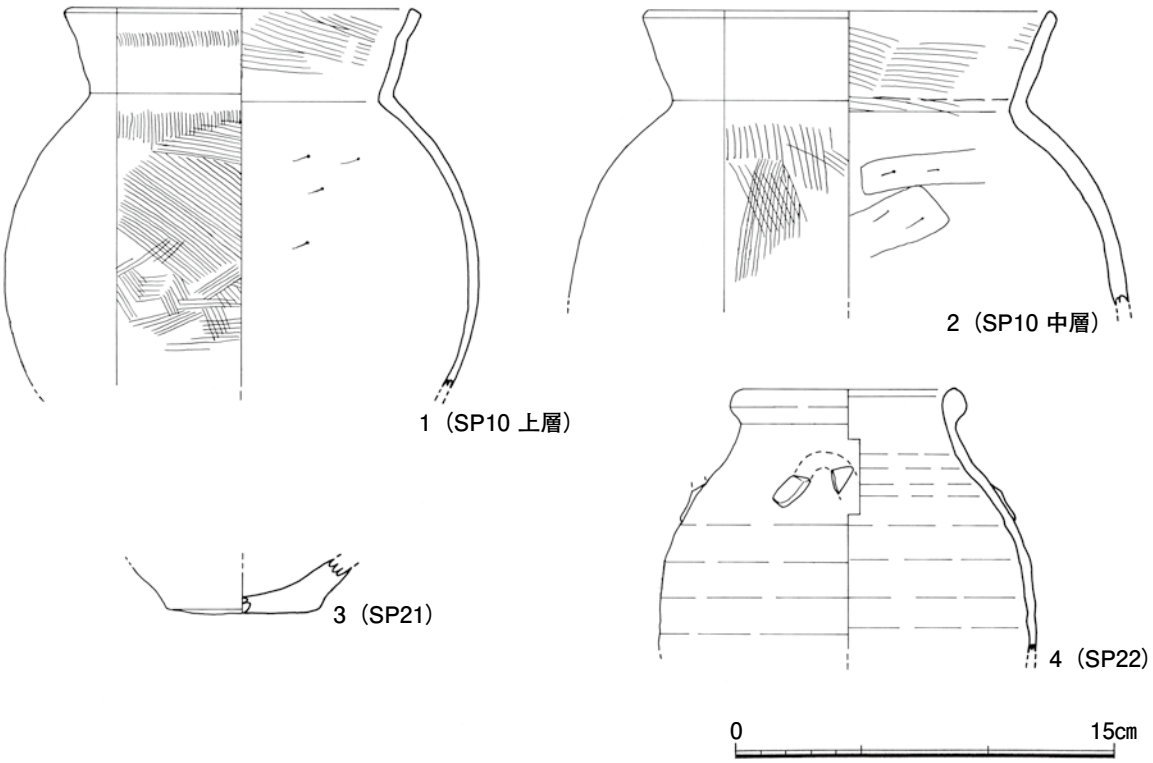


図９　ピット出土遺物実測図（S＝1/3）

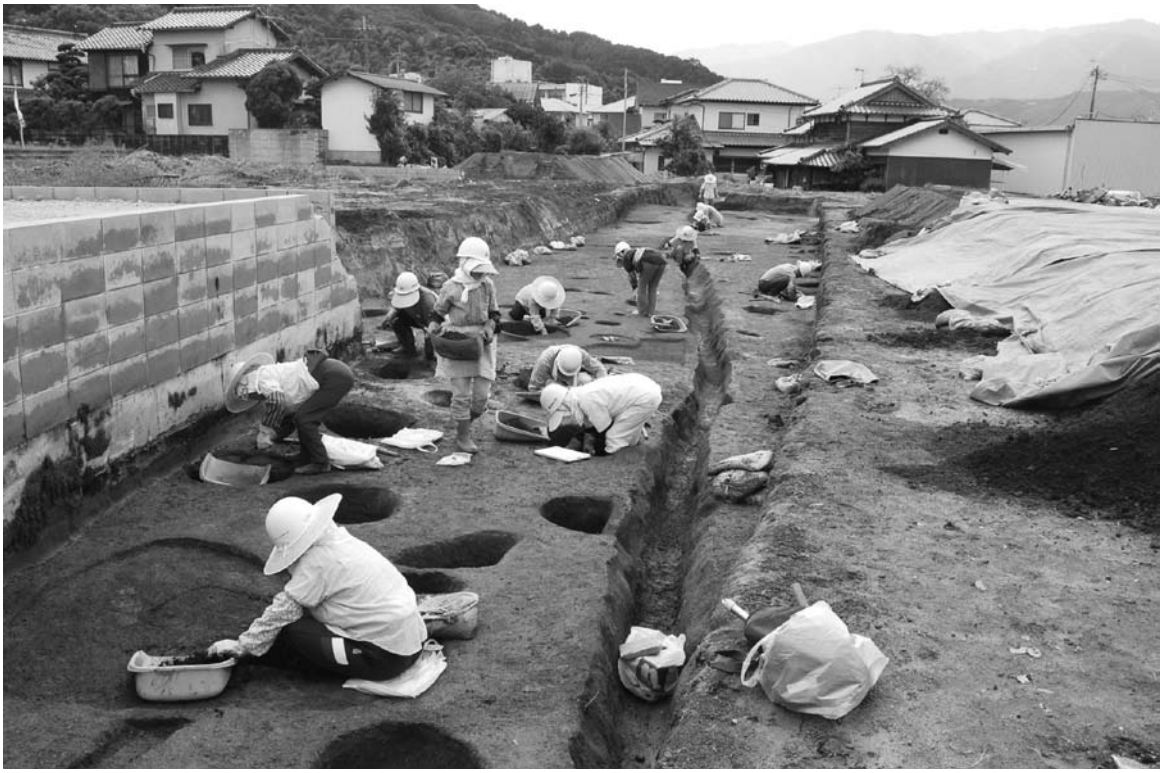
第４章　まとめ

調査区北半部の黄褐色シルト層が残存する範囲を中心に、溝・掘立柱建物・土坑・ピット群を検出した。出土遺物は細片が多かったため、時期比定は厳密さにかけるが、掘立柱建物・焼土坑については古墳～古代、溝は中世以降のものと見られる。土師器壺２点が出土したSP10の存在から、古墳時代に確実にさかのぼる遺構が付近に展開するものと見られる。

ヒワタシ遺跡の調査は緒についたばかりであり、遺跡の実態把握について今後の調査が期待される。

図版 1

調査区全景（北から）



調査作業風景

図版２

調査区東壁土層断面（北西から）

調査区西壁土層断面（南東から）

図版３

SB03（西から）

SB03・SD01（北から）

図版４

SK02（西から）

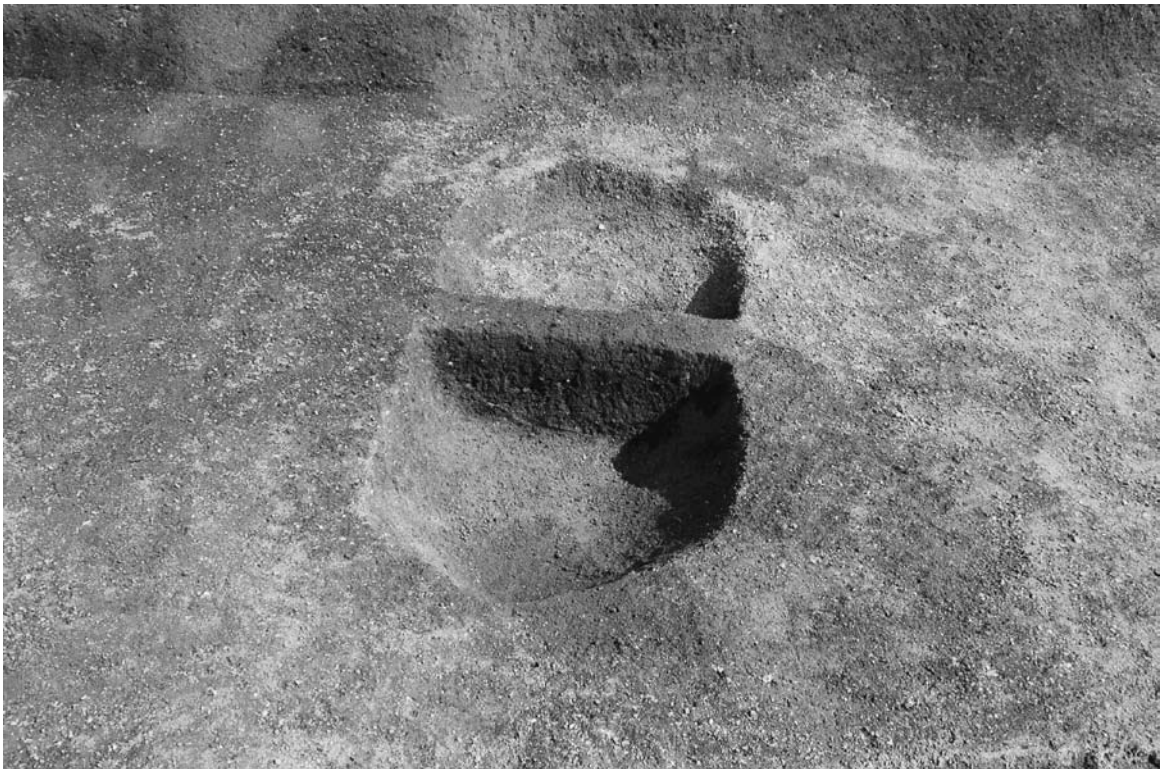
SK02 土層断面（西から）

図版５

SP10 上層　土師器壺出土状況（西から）

SP10 中層　土師器壺出土状況（西から）

図版６



SK04（西から）

図版７

1（図６－１）

2（図９－１）

3（図９－２）

4（図９－３）

5（図９－４）

出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな　ひわたしいせきいち
書名　ヒワタシ遺跡１
副書名　ヒワタシ遺跡第１次調査報告
巻次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　第１０９９集
編著者名　木下博文
編集機関　福岡市教育委員会
所在地　〒810－8621　福岡市中央区天神1－8－1　TEL 092（711）4667
発行年月日　2010年３月23日
所収遺跡名ふりがな　ひわたしいせき
所収遺跡名　ヒワタシ遺跡
所在地ふりがな　ふくおかしさわらくひがしいるべ
所在地　福岡市早良区東入部２－１７７３－１・２、１７７６
市町村コード　４０１３１
遺跡番号　０３３９
北緯33°31′26″　東経130°20′14″
調査期間　2008.　9．22～10.　15
調査面積　329.5㎡
調査原因　分譲宅地造成
種別　集落
主な時代　古墳／古代／中世
主な遺構　溝１／土坑２／掘立柱建物１／ピット
主な遺物　土師器、須恵器、鉄滓、中国産施釉陶器、焼締陶器

ヒワタシ遺跡１

ヒワタシ遺跡第１次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1099集
2010(平成22)年３月23日

発 行　福岡市教育委員会
〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１

印 刷　祥文社印刷株式会社
〒812-0016　福岡市博多区博多駅南４－15－17